九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

栽培土壌を異にした場合のシクラメンの葉数の変化について

竹下, 繁
九州大学農学部

https://doi.org/10.15017/14165

出版情報：九州大学農学部農場研究資料. 6, pp.21-23, 1982-06. University Farm, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

栽培土壌を異にした場合のシクラメンの葉数の変化について

竹下　繁

この試験は栽培土壌を異にした場合の，シクラメンの草姿（葉数）の差異を明らかにする目的で行ったものである。

材料と方法

(i) 品種とその特性

品種のサーモンスカーレット系は早咲き性，耐暑性，耐病性が強く，大きな花を育成する目的で育種された系統であり，色彩の清明さなどに特徴がある。

(ii) 栽培土壌の種類

栽培に使用した土壌は川砂，焼ボタ，並土，混合1，混合2の合計5種類で，その組成の詳細は第1表に示している。これらの5種類の栽培土壌はいずれも大きさ6㎜の節を通過した部分を使用した。なお土壌は当九大農場の第三紀層に属する水田土壌のことである。

第1表　栽培土壌の種類

栽培土壌＼材料名	川砂	焼ボタ	堆肥	籾炭	土壌
川砂	100	—	—	—	—
焼ボタ	—	100	—	—	—
並土	70	—	10	20	—
混合1	50	—	—	—	50
混合2	—	50	—	—	50

※　数字%

(iii) 栽培方法

(1)場所：当農場3号温室，総ガラス張り南北棟で，約49.5 ㎡を使用した。

(2)植付：9月中旬播種，翌年4月9日9㎝素焼鉢に鉢上げ（当時の葉数4.5枚），6月上旬に12㎝鉢に移植し，7月下旬に15㎝素焼鉢に鉢替えした。

(3)肥料：なたね油粕3㎏，骨粉1㎏を20ℓポリバケツに入れ，水を加えて発酵させた液肥（約20ℓ）をさらに10倍にうすめて，一週間に2回の割合で施肥した。また上記液肥に加えてカイタク5号，住友液肥2号も使用した。

(4)防除：土壌の消毒はメチルブロマイドで行ない，植物の病害虫防除にはマラソン，エンドリン，ニッソール，ダイセン，水銀ボルドーなどを使用した。

(iv) 調査の方法

生育にともなう葉数の調査は，4月9日より10月29日までの期間に行なった。10月下旬になると，草姿は整い，葉数の増加はほとんど止まり，雌花の伸長が急速に進んだ。個体数は1区30個体とし，約30日おきに完全に展開した葉を数えた。

結 果 と 考 察

第2表のシクラメンの初期生育を見ると，葉数の差はまったく認められなく，同一葉数の4.5枚であった。茎葉重，球重については焼ボタ，川砂および並土の3区において混合2および混合1の両区より幾分高い傾向が認められる。

第2表 シクラメンの初期生育（4月9日調査）

調査項目 / 土壌の種類	葉 数（枚）	茎葉重 (g)	球 重 (g)
川 砂	4.5	3.7	11.7
焼 ボ タ	4.5	4.0	11.7
並 土	4.5	3.7	11.7
混 合 1	4.5	3.2	11.5
混 合 2	4.5	3.3	11.5

第3表 葉数の変化 （枚）

調査日 / 土壌の種類	4月9日	5月29日	6月29日	7月28日	8月29日	9月29日	10月29日
川 砂	4.5	5.8	8.8	10.6	13.8	19.4	21.0
焼 ボ タ	4.5	5.3	8.8	8.7	12.1	16.4	17.9
並 土	4.5	7.3	10.5	15.3	17.1	26.7	28.0
混 合 1	4.5	6.3	9.0	10.6	12.9	18.3	23.4
混 合 2	4.5	7.2	10.8	14.0	15.2	22.0	24.7

次にシクラメンの生育の経時的変化を調査した。第3表の葉数の変化では，特に焼ボタ区，川砂区，混合1の3区は5月から高温期にかけて葉数の増加が少ない。このことが最後の調査日である10月29日まで尾を引いて，葉数は並土，混合2，混合1，川砂，焼ボタの順に低い値を示した。葉数の変化をさらに詳細に見ると，川砂区は7月と8月の差が3枚，7月と9月の差は9枚になっている。焼ボタ区では7月と9月の差は7.6枚と川砂区よりその差が小さかった。混合1区では7月と8月の差は2.3枚，7月と9月との差は7.7枚で，混合2区は7月と8月の差1.2枚，7月と9月との差は8.0で，混合1と混合2の両区は，先の川砂，焼ボタ両区の7月と8月の差3枚以上より小さかった。このことは7月,8月の高温の影響が特に川砂区と焼ボタ区で著しかったことを示している。並土区は7月と8月の差が1.8枚，7月と9月の差は11.4枚で，涼しくなった9月に急に増加した。

以上のことから，結論として高温期に植物の生育に適する様な土の配合を研究してゆくことが，重要な問題と考えるが，それらの土壌は団粒構造を有し，大なる保水力と保肥力を兼ね備えた栽培土壌が望ましいと考える。